

# 白居易「就中腸斷是秋天」試論

——天を伴う四季表現を中心にして——

埋 田 重 夫

## 〔一〕 序

古典中國語のなかには、文言と白話それぞれの用法を異にする一連の語彙がある。「妻子」（妻と子・妻その人）「慙愧」（恥じ入る・感謝する）「已經」（已にくを経た・已に）などは、その代表的なものであろう。この種の文白異同語は、名詞・動詞・副詞・形容詞・接續詞・介詞の各品詞に幅廣く及んでおり、『全唐詩』に限定してみても豊富な用例が見出せる。安史の亂以後の中唐に出現した白居易は、口語系語彙を自らの詩文へ導入することに積極的な詩人であるが、これら文白異同語の領域においても際立った成果を擧げている。本篇では文言系と白話系の兩義を併せ持つ詩語「秋天」（秋の天・秋<sup>②</sup>）などを取り上げ、一般に「元輕白俗」と評されることが多い彼

の言語表現について分析してみたいと思う。

特色ある詩語を通時的共時的に把握することは、時代の思潮や詩人の個性を読み解くうえで非常に有効な手段である。かつまたこうした詩語の研究は、韻文中で専ら機能する語法や修辭の問題とも深く關わつていえると言える。唐詩に代表される中國古典詩は平仄や對句を極めて重要な修辭技法に位置づけており、そのことは必然的に詩人による詩語の取捨選擇や配置工夫にも大きな影響を與えていると考えられよう。

白居易は生涯にわたって言語のもつ新たな可能性を探求し續けた文學者であるが、ここでは主に「天<sup>①</sup>」を伴う四季表現を中心に据えて、關連する複數の問題について検討を加えていきたい。

## 〔二〕白居易の「暮立」詩と問題の所在

元和六年（八一）の夏以降に、白居易は二つの深刻な喪失體驗をしている。この年の陰曆四月三日には母陳氏（享年五十七歳）が長安宣平里の第宅で死去し、次いで服喪のため退居した華州下邽縣義津郷の金氏村で長女金鑾（享年三歳）が夭逝する。四十歳になつて突然訪れた母と娘に對する丁憂生活は、元和六年四月から元和九年冬までの三年半の長きに及び、彼の前半生における死生觀や人生觀の一大畫期をなしている。

自ら定めた墳墓の地に留まり、骨肉の靈とともに過ごす濃密な時間のなかで、内省的な優れた抒情詩が數多く生み出されていくが、「暮立」<sup>(079)</sup>もそうした作品の一つである。各種の唐詩選集や本邦の『和漢朗詠集』（卷上・秋・秋興<sup>(3)</sup>）にも收録され、最も人口に膾炙した白氏七言絶句の一首となつてゐる。問題の所在を明らかにするために原詩・訓讀・通釋を掲出した。

暮立 暮れに立つ

黄昏獨立佛堂前 黄昏 獨り立つ 佛堂の前

滿地槐花滿樹蟬 滿地の槐花 滿樹の蟬

大抵四時心總苦 大抵 四時 心總て苦しきも  
就中腸斷是秋天 就中 腸の斷ゆるは是れ秋天

日暮れにたたずむ

一日の黄昏<sup>たそがれ</sup>どきにたつた一人佛堂の前に立てば、槐<sup>えんじゆ</sup>の花は大地いっぱいに散り敷き蟬<sup>ひぐらし</sup>の聲は樹木<sup>こたち</sup>に滿ちわたる。およそ四季の移ろいはいつでも心につらく思われるが、なかでもとりわけ腸<sup>はらわた</sup>が斷ち切れるほどに悲しいのは秋である。

下邽退居期の居易は、祖父白鏐・祖母薛氏・父白季庚・母陳氏・外祖母陳氏・末弟白幼美・長女金鑾の亡骸を下邽縣義津郷北原の墓地へ統合し葬祭することに全力を盡くしている<sup>(4)</sup>が、本詩はそれら墳墓の營みが完全に終了した元和九年四十三歳に作られている。人の一生にあつて身體の老いを意識し始める四十代、一年四季のうちで萬物が衰殘凋落していく秋、一日のなかで太陽が地平線に没していくたそがれ時、渭村の佛堂の前に立ち盡くす詩人の胸に去來したものは、既に泉下の佳人となつた骨肉諸靈への斷ち切り難い念いであつたと言わねばならない。その哀絶の情は、大地に降り落ちる黄色い槐の花、短い生命故に木立いっぱいに鳴き急ぐ寒蟬に



よつて、過不足なく象徴されている。前半第二句目に重出する「滿」には、死へ連なる重い情念が文字通り充溢していると考えられよう。

叙景から抒情へと轉換する後半二句では、「大抵」（およそ・要するに・つまり）「就中」（その中で最も・殊に・ひとときわ）という語彙をそれぞれ文頭に配することで、「腸斷」「秋天」の心象を一氣に繋ぎ合わせて「悲秋惜別」の詩情を詠出する。白居易の斷腸表現は合計三十四例を数え、その大多數が自身の悲愁や近親者への哀惜である點は注意されてよい。白詩における雅語「腸斷」（平仄）「斷腸」（仄平）は、『世說新語』「黜免第二十八」に見える「母猿の典故」をほぼ忠實に襲用していると言えよう。いわゆる五臟六腑によつて人生究極の悲哀——例えば親故との死別離など——を描寫するのは、中國古典における傳統的發想であろうが、彼もまたこの延長線上にあつて各種の身體表現を展開している。五十五歳で體驗した四歳年少の愛弟白行簡との永訣に際し、「哀纏手足、悲裂肝心」「每開一卷、刀攪肺腸」「每讀一篇、血滴文字」「仰天一號、心骨破碎」（「祭弟文」<sup>2932</sup>）と述べる用例は、その確かな傍證にほかならない。ここには不可視な心情を可視な肉體を通じて表現するという中國文化獨特の感性様式が顯現している。

白居易「就中腸斷是秋天」試論（埋田）

白居易の「暮立」は平起式（正格）の七言絶句であり、その韻律は極めて嚴密に組み立てられている。唐代近體詩における遵守規則（二四不同・二六對・反法・粘法）と忌避規則（平三連・孤平）の運用は完璧であり、押韻字（前・蟬・天）も「下平聲先韻」によつて統一されている。こうした詩律構造を持つ本詩に残された最後のポイントは、第四句終末に出現する「秋天」の解釋である。結論から言つてこの七絶が悲秋詩である事實は動かない。加えて「大抵四時心總苦、就中腸斷是秋天」の漢語文脈では、「秋天」二字を「秋の天」と解することはほとんど全く不可能である。四つの季節から秋だけを取り出し、それを「斷腸」（悲哀）の時節と斷定しているからである。修辭上の措置として脚韻字「天」が配置されたのであり、「空」の實義は完全に脱落していると考えてよいであろう。現代の中國社會でも、春夏秋冬は各々「春天」「夏天」「秋天」「冬天」と表され、漢字二文字で季節・時節・氣候を示す語法が廣く定着している。中國語史的にみて、これらの語彙が急速に發達するのは、ほぼ唐代に入つてからである。『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社、一九八九年三月）の「春天」「夏天」「秋天」「冬天」の條が、杜甫「春天衣著爲君舞、蛺蝶飛來黃鸝語」（白絲行）、王建「臘月近湯泉不凍、夏天臨渭屋多涼」（昭應官

舍書事)、張謩<sup>(7)</sup>「秋天、林下不知春、一種佳遊事也均」(九月<sup>ママ</sup>)、周賀「背經來漢地、袒膊過冬天」(贈胡僧)の如く、初出文獻にそれぞれ唐詩一首を引用するのはこの點からも納得しやすい。確認できたこれらの事柄を前提にして、次節では白居易作品をさらに詳しくみていきたいと思う。

### 〔三〕白居易における用例

唐代最多の作品量を誇る『白氏文集』のなかから「天」を伴う詩語を抽出し、その語彙・語法の實態を考察することは、白居易文學を言語と修辭という二面から解讀していくうえで興味深い作業と言える。白詩の用例は前述「暮立」<sup>(0790)</sup>一首に留まらず、著名な七言律詩「香鑪峯下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁五首其一」<sup>(0975)</sup>を初めとして合計十二首の詩篇に及んでいる。傳記的には仕官・丁憂・外任・退休の經過を辿る三十代半ばから六十代半ばの長い期間で創作されている點が留意されよう。四つの季節に「天」が結合するケースについて、當該作品の詩題・詩型・年齢・場所・官職を時系列で提示してみたい。

(1)「秋霖中過尹縱之仙遊山居」<sup>(0396)</sup>(五古・三十五歲・盤屋・盤

屋縣尉)、(2)「秋蟲」<sup>(0754)</sup>(五絶・三十七歲から三十九歲・長安・翰林學士)、(3)「和夢遊春詩一百韻」<sup>(0804)</sup>(五排・三十九歲・長安・翰林學士)、(4)「夜雨」<sup>(0451)</sup>(五古・四十歲・下邳・丁憂)、(5)「暮立」<sup>(0790)</sup>(七絶・四十三歲・下邳・丁憂)、(6)「官舍內新鑿小池」<sup>(0282)</sup>(五古・四十五歲・江州・江州司馬)、(7)「香鑪峯下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁五首其一」<sup>(0975)</sup>(七律・四十六歲・江州・江州司馬)、(8)「眼病二首其一」<sup>(2477)</sup>(七律・五十五歲・蘇州・蘇州刺史)、(9)「嵩陽觀夜奏霓裳」<sup>(2798)</sup>(七律・六十一歲・嵩山・河南尹)、(10)「秋日與張賓客・舒著作同遊龍門、醉中狂歌、凡二百三十八字」<sup>(2968)</sup>(七古・六十二歲・洛陽・太子賓客分公司)、(11)「早春憶蘇州、寄夢得」<sup>(3109)</sup>(七律・六十三歲・洛陽・太子賓客分公司)、(12)「曉眠後、寄楊戶部」<sup>(3280)</sup>(七絶・六十五歲・洛陽・太子少傅分公司)。

全體的にみた場合、「秋天」九例、「春天」二例、「冬天」一例、「夏天」零例の分布となっており、「春秋冬」三種類の季節のなかでも、詩語「秋天」の特出が目される。採用詩型は「五言古詩」三首、「七言古詩」一首、「五言絶句」一首、「七言絶句」二首、「七言律詩」四首、「五言排律」一首という状況であり、五古と七律への偏重が著しい。また「古體と近



體」「五言と七言」の割合はほぼ拮抗している。これらの諸點を踏まえて第一に指摘すべきは、傳統的・古典的・書面語的な文言系の語彙・語法の三例全てが「秋天」（秋の空）で詠われているという事實である。唐朝以前における詩語「秋天」の基本義用法は、北齊の蕭慤「秋天擬文學、秋水擅莊蒙」（「奉和悲秋應令詩」）〔逢欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』北齊詩卷二（中華書局、一九八三年九月）〕を嚆矢にすると考えられるが、白居易はこの言葉の系譜を忠實に繼承している。清秋の頃、大氣が乾燥して澄み渡る「秋天」（秋旻）は、唐代に活躍した詩人達が最も好んで取り上げた風景の一つであった。最初に全ての用例を引用する。

①「……秋天殊未曉、風雨正蒼蒼。不學頭陀法、前心安可忘。」〔「夜雨」〔0451〕・五古〕。

②「……清淺可狎弄、昏煩聊漱滌。最愛曉暝時、一片秋天碧。」〔「官舍內新鑿小池」〔0282〕・五古〕。

③「秋天高高秋光清、秋風嫋嫋秋蟲鳴。……」（「秋日與張賓客・舒著作同遊龍門、醉中狂歌、凡二百三十八字」〔2968〕・七古）。

④の「秋天殊未曉」（秋の空はいつまでたっても明けない）、②

の「一片秋天碧」（どこまでも廣がる秋空のような碧色）、③の「秋天高高秋光清」（秋の空は高く高く澄みわたる）では、傍點部の描寫（動詞の「曉」・量詞の「一片」・形容詞の「碧」と「高」）から考えて、やはり文言系の語彙であると結論づけられよう。對偶による規定に加えて文脈の優先は、文白異同を識別する際の重要な指標になっている。さらにまた、これらの用法が平仄式の拘束が緩やかな古體詩型に集中している事實も見逃せないであろう。

白居易の詩歌について第二に言及しなければならないのは、非傳統的・俗語的・口頭語的な白話系の語彙・語法としての「秋天」三例の存在である。當然この内には、既に前節で検討した七絶「暮立」〔0790〕が含まれるが、ここではそれ以外の二首を紹介してみたいと思う。

④「……月流春夜短、日下秋天速。……」（「和夢遊春詩一百韻」〔0803〕・五排）。

⑤「開元遺曲自淒涼、況近秋天調是商。愛者誰人唯白尹、奏時何處在嵩陽。……」（「嵩陽觀夜奏霓裳」〔2798〕・七律）。

④は元稹「夢遊春七十韻」（『全唐詩』卷四二二）への和韻詩

で、一百韻二百句からなる長篇の五言排律である。整齊たる對句と詩律が複数の典故を用いつつ縦横無盡に驅使されており、對偶表現に對する白居易の卓絶した才能を窺わせる作品と言える。その八十一句八十二句に現れる「月流れて春夜短く、日下りて秋天速し」は、名詞・動詞・形容詞の各々を徹底的に對語化して、忽焉と過ぎ逝く歲月（青春の日々）の無常を述べたもの。「春の夜」と「秋の天」は對偶によつて相互に規定されてはいるが、ここでは「流」「短」「下」「速」といった時間經過を指示する文意が優先して、秋そのものを意味する白話系語彙と斷定できよう。對偶よりも文脈が強く作用する事例は⑤「況近秋天……」（まして秋に近く……）にも認められ、文白兩義を截然と區切る大きな根據になつていふと考へてよい。

④⑤で掲げた白話系の詩語「秋天」が、何れも律詩を中心とした近體詩に使用されている點はまことに興味深い。白詩の用例で第三に検討したいのは、全て七言律詩に詠い込まれる俗語「春天」「冬天」の三例である。詩律の分析を含むのでその全文を挙げる。

⑥「五架三間新草堂、石堦桂柱竹編牆。南簷納日冬天暖、

北戸迎風夏月涼。灑砌飛泉纔有點、拂窓斜竹不成行。來春更葺東廂屋、紙閣蘆簾著孟光。」（「香爐峯下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁五首其一」〔975〕・七律）。

⑦「散亂空中千片雪、蒙籠物上一重紗。縱逢晴景如看霧、不是春天亦見花。僧說客塵來眼界、醫言風眩在肝家。兩頭治療何曾差、藥力微茫佛力賒。」（「眼病二首其二」〔247〕・七律）。

⑧「吳苑四時風景好、就中偏好是春天。霞光照後殷於火、水色晴來嫩似煙。士女笙歌宜月下、使君金紫稱花前。誠知歡樂堪留戀、其奈離鄉已四年。」（「早春憶蘇州、寄夢得」〔3109〕・七律）。

冬は暖かく夏は涼しい廬山草堂での快適な生活を説く⑥、強度近視と飛蚊症に苦しみ春でもないのに眼中に花を認める⑦、刺史となつて過ぎた蘇州の風景では春が一番好きであると親友劉禹錫に告白する⑧。この三首に詠われる「冬天」「春天」は全て口語系の「冬」と「春」であり、詩人の意識は明らかに空間（天空）よりも時間（季節）にある。そしてまた各詩における當該二句の平仄式は、「南簷納日冬天暖、北戸迎風夏月涼」（平（平）仄（仄）平（平）仄、仄（仄）平（平）仄（仄）平）「縱逢晴景如



看霧、不是春天亦見花」(仄平平仄平、仄平仄平)「吳苑四時風景好、就中偏好是春天」(平仄平平仄、仄平仄平)となっており、二四不同・二六對・反法などの詩律が整然と守られていることがわかる。唐代近體詩のなかでも七言律詩は「對偶觀念の純粹形式」と見なされ、句式から韻律に到るまで徹底した對偶性を眞骨頂としている。平聲(變化しないトーン)と仄聲(變化するトーン)の二項對比によつて韻律の完璧な對稱性(symmetry)を追求する七言律詩において、四季を示す二音節語彙も當然分化していくことになる。白居易が用いる四季表現を分類整理すれば、おおよそ以下になる。各語の平仄狀況も併せて明記する。

- [a] 春を表す二音節語 ①「春天」(平平)、②「春來」(平平)、③「春中」(平平)、④「春日」(平仄)。  
 [b] 夏を表す二音節語 ①「夏中」(仄平)、②「夏日」(仄仄)、③「夏月」(仄仄)。  
 [c] 秋を表す二音節語 ①「秋天」(平平)、②「秋來」(平平)、③「秋中」(平平)、④「秋時」(平平)、⑤「秋日」(平仄)、⑥「秋候」(平仄)。  
 [d] 冬を表す二音節語 ①「冬天」(平平)、②「冬來」(平平)、

白居易「就中腸斷是秋天」試論(埤田)

### ③「冬日」(平仄)。

白氏の五排および七律④⑤⑥⑦⑧にあつて、各詩各句の該當箇所可以使用できる語彙は、「平平」(天・來・中・時)の組み合わせ以外には不可能であつたことが改めて理解される。もしここに「平仄」(日・候・季)「仄仄」(夏日・夏月)の詩語を選択すれば、近體詩を近體詩たらしめている律體は完全に崩壊してしまうことになる。詩語自體が有する心象や餘情という觀點から白居易は、先の諸詩において「來」「中」「時」ではなく「天」を敢えて選び取つたのだと推測される。彼は「天」が潜在的に持つ音調律・押韻律・接尾字の可能性を大きく掬い上げた詩人と考えられよう。結論的に言えば天を伴う四季表現は、唐代近體詩(律詩・排律・絶句)の出現と發展に伴つて生じた「平仄互用」の流れのなかで、急速に成長してきた詩語であると判斷される。

以上の指摘にもし大きな誤りがないとするならば、白居易作品に認められる「四季プラス天」について、<sup>①</sup>白話的用法が律詩に使われていること、<sup>②</sup>文言的用法が古體詩に用いられていること、などの事實も新たな意味を帯びてくる。第四の論點として取り上げなければならないのは、この詩語と詩

型の関係性である。律詩は全體の整合性や均質性を重視する詩型であり、その基調は徹底した對偶表現の妙味にあると言つてよい。したがつて配置される漢字一字一字の意義や比重も大きく、對偶性を根幹とした律體的韻律故に、輕みや偏りといった表現機能からは最も遠い様式となっている。そのような律體の均質性のなかに二字二音一義の俗語系の語彙が導入された場合、そこには意味と心象の空白域とも言うべきものが生じることになる。韻律の眞空（有拍無音の現象）であれ意味の眞空（虛字化による實義の脱落）であれ、欠損感覺を伴う空白域にはそれを補填しようとする力が働きやすい。律體で完全に統一されているなかにこのような箇所を設定することは、一首全體のバランスを故意に崩していわば「輕」や「俗」や「偏」といった感覺を發生させることを意味する。居易の天を伴う四季表現——白話的用法——がより多く近體詩の律詩（特に七言律詩）に集中するのは、この種の表現効果を敢えて意圖したものであつたと考えられる。平仄式の拘束を受けない對極の古體詩において、その全用例が文言用法（二字二音二義）で占められている事實は、逆の意味でこの指摘の蓋然性を證明している。「雅と俗」「重と輕」「密と疎」「實と虛」……などのバランスの取り方や有り様は、詩語と詩型の相關

性を通して詩人の個性（言語と修辭の特色）を析出する際に、極めて重要な視點を提供していると思われる。

ここまで白居易詩に現れる「春天」「秋天」「冬天」について重點的に考察してきたが、第五に觸れておきたいのは天空や季節を明示するのではなく、いわゆる時候や天候を漠然と指示する用法である。この種の詩篇を三首舉げてみたい。古體と絶句で詠われている點も留意される。

⑨「……秋、天、床、席、冷、雨、夜、燈、火、深。怜君寂寞意、携酒一相尋。」（「秋霖中過尹縱之仙遊山居」〔0396〕・五古）。

⑩「軟綾腰褥薄、涼、秋、天、穩、暖、身。一覺曉眠殊有味、無因寄與早朝人。」（「曉眠後、寄楊戶部」〔3280〕・七絶）。

⑪「切切闇窓下、嚶嚶深草裏。秋、天、思、婦、心、雨、夜、愁、人、耳。」（「秋蟲」〔0754〕・五絶）。

ここに詠われる三つの「秋天」は、文脈と對句から考えて秋の時候や天氣を描寫したものと考えられよう。「涼冷」という皮膚感覺表現や「秋天思婦心、雨夜愁人耳」の嚴密な對偶表現は、そうした判斷を導き出す根據になり得ている。この種の時候を述べる用例は白居易の詩歌から大量に指摘するこ



とができる。典型的な詩語を四例だけ引用してみたい。

⑫「……疏韻秋、撼撼、涼陰夏、淒淒。春深微雨、夕、滿葉珠、  
 濯。歲暮大雪天、壓枝玉皚皚。四時各有趣、萬木非其儕  
 ……」（「庭松」〔0568〕）。

……」（「庭松」〔0568〕）。

⑬「朝亦嗟髮落、暮亦嗟髮落。落盡誠可嗟、盡來亦不惡。  
 既不勞洗沐、又不煩梳掠。最宜濕暑天、頭輕無結縛。  
 ……」（「嗟髮落」〔2296〕）。

……」（「嗟髮落」〔2296〕）。

⑭「……泥濘非遊日、陰沈好睡天。……」（「雨中招張司業宿」  
 〔2616〕）。

⑮「……出遊愛何處、嵩碧伊瑟瑟。況有清和天、正當踈、散  
 日。……」（「詠興五首其二、出府歸吾廬」〔2957〕）。

各詩の文脈と對句からみて、「大雪天」（大雪の日）「濕暑天」（蒸し暑い日）「好睡天」（眠るのにふさわしい日）「清和天」（清らかでおだやか日）は、空間の描寫ではなく、日や氣候を表現したものと解釋するのが適當であろう。虚實皮膜的な用法を含め、「天」がもつ言語表現のさまざまな可能性は、白居易という詩人の登場によって大きく切り拓かれたと言わねばならない。次節では唐代の詩人全體における白居易の位相について、

白居易「就中腸斷是秋天」試論（埋田）

個々の資料に即しながら、さらに詳しく論じてみたい。

#### 〔四〕唐代詩人における用例

春夏秋冬に「天」が伴う語彙は、中國古代文學の雙壁である『詩經』『楚辭』には見當たらず、その後に續く漢魏六朝詩の世界でもほとんど用例を検出できない。平聲字「天」の語法が大きな飛躍を遂げるのは、間違いない唐代に入ってからである。『全唐詩』九百卷に收載する作品および作者を對象にして、「春天」「夏天」「秋天」「冬天」の詠われ方を分析することは、詩語研究のみならず白居易論としても欠くべからざるものと言える。ここでは特定詩語の使用状況を唐三百年のなかで俯瞰し、その座標上に再び白居易を位置づけることで、「詩人と言語」「言語と時代」という問題について考えてみたい。各語ごとに確認できた詩人名と用例数を以下に列挙し、<sup>(9)</sup>出典となる『全唐詩』の卷數も示す。また同一詩篇中に複數の語彙を含む場合は、\*印を付して注記を加えている。

- 〔A〕春天を詠う詩人（張說 1〔89〕・孟浩然 1〔160〕・李白 1〔162〕・杜甫 4〔216・224・232・234〕・李端 3〔285〕・楊巨源 1〔333〕・張籍 1〔382〕・元稹 1〔409〕・李頻 1\*〔587〕〔春

天&秋天)・紇干著1(769)・皎然2(815・821)。

[B] 夏天を詠う詩人(韋應物1(193)・高適1(211)・王建1(300)・周賀1(503)・張祐1(511)・寒山1\* (806)〔夏天&冬天〕・齊己1(845)。

[C] 秋天を詠う詩人(盧照鄰2(42)・邵大震1(63)・劉希夷1(82)・徐知仁1(111)・李昂1(120)・李林甫1(121)・王維1(125)・祖詠1(131)・李頎1(134)・陶翰1(146)・劉長卿3(147・148・151)・李華1(153)・蕭穎士1(154)・李白1(162)・韋應物1(186)・岑參1(200)・高適6(213・214)・杜甫10(217・219・223・225・227・230・231・233)・錢起1(237)・獨孤及2(247)・任華1(261)・耿漳2(268)・戎昱1(270)・姚倫1(272)・張衆甫1(275)・盧綸1(276)・王建5(298・300・301)・劉商1(304)・權德輿3(322・328)・段文昌1(331)・韓愈1(344)・柳宗元1(353)・張仲素1(367)・張籍1(382)・元稹1(408)・劉言史1(468)・陸暢1(478)・鮑溶1(487)・施肩吾1(494)・顧非熊1(509)・張祐1(510)・雍陶1(518)・趙嘏1(550)・盧肇1(551)・郭夔1(566)・李羣玉3(569・570)・賈島2(574)・李頻1\* (587)〔秋天&春天〕・李昌符1(601)・陸龜蒙1(618)・曹唐1

(640)・杜荀鶴1(692)・王穀1(694)・韋莊1(700)・徐夔1(711)・李洞1(723)・陳陶2(745・746)・麻溫其1(772)・無名氏1(786)・皎然3(816・819)・田四郎1(816)・吳筠1(888)。

[D] 冬天を詠う詩人(周賀1(503)・寒山1\* (806)〔冬天&夏天〕)。

まず最初に注目されるのは、唐詩では文言系用法が多數を占めていて、純粹な白話系用法は限定的に使われているという事實である。例えば盛唐の杜甫は、「春天」四例「秋天」十例と極めて多作であるが、白話系の語彙は次に挙げる三例(七古一首と五律二首)に留まっている。またそこには、白居易のような詩語と詩型の關係性も認められない。

⑬ 「……春天、衣著爲君舞、 蝶飛來黃鸝語。……」(杜甫「白絲行」・『全』216)。

⑭ 「……渭北春天樹、江東日暮雲。……」(杜甫「春日憶李白」・『全』224)。

⑮ 「……爲郎從白首、臥病數秋天。」(杜甫「歷歷」・『全』230)



ここに示される「春天衣著爲君舞」（春には上衣を着て君のために舞う）「渭北春天樹」（北方渭水の邊にある春の樹々）「臥病數秋天」（病に臥して秋の日にちを數える）は、唐代における比較的初期の用例と考えてよいであろう。杜甫は白居易に繋がる數少ない詩人の一人である。唐詩にみえる「秋天」九十三例は、「春天」十七例「夏天」七例「冬天」二例を數量的に壓倒しているが、その大部分はやはり「秋の空」であり、杜詩⑮と同じ口語的用法の作例は少數となつてゐる。「秋天」を取り上げる唐代の詩人は、盧照鄰・劉希夷・王維・劉長卿・李白・韋應物・岑參・高適・杜甫・韓愈・柳宗元・張籍・元稹……など極めて多くに及ぶが、彼らが好んで詠うのは、「高」「明」「遠」「淨」「靜」「涼」「晴朗」「萬里」「蒼翠」「漠漠」「瑟瑟」「如鏡」「如水」「寂寞」「搖落」と表現される秋の空そのものである。唐代文人にとつて何處までも續く清秋の青空は、さまざまな詩的感興をもよおす一大景物であり續けたと言えよう。唐初から唐末までの廣範な詩人による「秋天」の詩材化は、この指摘を客觀的に裏づけている。逆にまた「冬天」および「夏天」の不盛行は、生理感覺や詩的心象という意味で、當初から詩語としての展開に難點があつたとも考えられる。酷寒烈暑の天空は、詩人達の興趣をそそる對象ではなかつた

白居易「就中腸斷是秋天」 試論（埤田）

のである。かくして唐詩は「秋天」と「春天」を中心にして詩材および修辭の深化が圖られていくことになる。

次に留意したい特色は、白話系語彙が盛唐末あたりからまとまつて登場し、中唐から晩唐に活躍した詩人によつて散發的に試行されている點である。天を伴う四季表現は、白居易を一つの頂點（全十二例中六例）とするものの、その流れは系統立てて繼承されることはなかつたと判斷される。杜甫の作品に若干認められる俗語用法は、白居易の出現で一時的に擴張するが、それ以上の發展を最後まで見せることはなく、個別に細々と踏襲されていつたと結論づけられよう。初唐盛唐の詩人がほとんど試行しなかつたこの口語系語彙は、杜甫――白居易――中唐晩唐の小詩人というか細い系譜のなかで、その言語表現の可能性が模索され追求されたのである。文脈・對偶・詩律の檢討から白話系用法と特定し得る詩篇を複數紹介してみたい。寒山詩二首と「天」を韻字にする作例の多さが特に注意される。

⑮ 「……春天百草秋始衰、棄我不待白頭時。……」（張籍「白頭吟」・『全』<sup>382</sup>）。

⑯ 「楊子愛言詩、春天好詠詩。……」（元稹「憶楊十二」・『全』

409。

②1 「……臘月近湯泉不凍、夏天臨渭屋多涼。……」（王建「昭應官舍書事」・『全』300）。

②2 「人問寒山道、寒山路不通。夏天冰未釋、日出霧朦朧。……」（寒山「詩三百三首其九」・『全』806）。

②3 「……夏天將作衫、冬天將作被。……」（同前「詩三百三首其八十二・同前」）。

②4 「……清風長入坐、夏月似秋天。」（戎昱「玉臺體題湖上亭」・『全』270）。

②5 「貧居常寂寞、況復是秋天。……」（顧非熊「早秋雨夕」・『全』509）。

②6 「……寂寞春風花落盡、滿庭榆莢似秋天。」（雍陶「貧居春怨」・『全』518）。

②7 「……背經來漢地、袒膊過冬天。……」（周賀「贈胡僧」・『全』503）。

「春天」「夏天」「秋天」「冬天」の實作狀況については既に述べた。唐詩に現れる「天」に關して最後に言及すべきは、押韻字としての用法である。前掲②4②5②6②7は全て「天」を脚韻にした事例であるが、唐代後半では「く天」の詩語が急増

するに従つて、押韻律への工夫も積極的になされるようになる。例えば「寒天」「暑天」「陰天」「寒食天」「禁火天」「小雪天」「大雪天」「二月天」「五月天」「八月天」「風雨天」「孟春天」「仲春天」「季春天」「暮春天」「初夏天」「仲夏天」「季夏天」「孟秋天」「仲秋天」「季秋天」「孟冬天」「仲冬天」……などの語彙は全て脚韻の一部に使用されており、押韻のより一層の多様化を促進している。韻字の工夫と平仄の腐心は、この詩語に係る二つの重要な側面である。換言すればそれは、平聲字「天」に對する飽く無き詩的探究でもあったと考えられる。そして中唐詩人白居易は、この流れの中心にあることで、自己の文學に大きな成果をもたらしたと言ふべきであろう。名作として巷間に通行する「暮立」<sup>(0790)</sup>と「香爐峯下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁五首其一」<sup>(0975)</sup>の存在は、その確かな證である。

## 〔五〕 結語

ここまで四季と「天」が結合する詩歌表現について、白居易と唐詩人の作品を中心に考察してきた。現代漢語で常用する「春天」「夏天」「秋天」「冬天」は、盛唐の末頃から韻文に本格的に使用され始め、その後は個別に中晩唐の詩人達へと



繼承されていく。唐代近體詩は句法・平仄・押韻の厳格な適用を要求するが、これらの詩語もまたその成立と發展に併行する形で擡頭し成長してきたのである。唐詩全體では文言用法が大きく先行しているが、白話用法も一部の文學者によつて試行錯誤的に導入されたと言える。とりわけ白居易は、杜甫が部分的に試みた口語系の語彙・語法を受け継ぎ、接尾字「天」が持つ可能性を最大限に追求したと結論づけられる。彼は白話系の語彙を援用することに熱心であるが、それらは無原則に使われているのではなく、自身の嚴しい基準や選擇を経て用いられている。天を伴う四季表現において、文言用法を近體詩型——特に七言律詩に代表される律體——に多用しているのは、その結果生み出される詩的表現効果を十分に意識していたからである。それは單なる市井の「通俗」ではない、確信と根據に裏打ちされた「白俗」の實踐であつたと言わねばならない。この意味で白居易を單純に唐代白話詩人の系列に置くことは、必ずしも正鵠を射ていないであらう。傳統的な古典教養と正確な修辭技法を踏まえたその詩作のあり方は、俗語の導入と配置にも極めて細心であり、まさに「精絶」「精鍊」と呼ぶに相應しい獨自の言語觀に依據している。後世の批評家からしばしば冠せられる「白俗」は、自らの文

白居易「就中腸斷是秋天」試論（埤田）

學の個性を信じて生き抜いた白居易にとつて、會心の評語であつたと言えよう。

### 〔註〕

(1) 詳細は松尾良樹「唐代の語彙における文白異同」(『漢語史の諸問題』所收、京都大學人文科學研究所、一九八八年三月)を参照。

(2) 中國の傳統的な文言系辭書である『辭源』(修訂本)(商務印書館、一九七九年七月)の「天」の條には、①地面的上空。與「地」相對。②凡自然所成非人力所爲的都叫天。如天

產、天災等。③古人認爲天是有意志的神、是萬物的主宰。

④命運。——⑤舊時以「天次之序」比附倫常關係、以天爲至高的尊稱。如稱君、父、夫爲天。——⑥仰賴以爲生存者稱天。

——⑦時節、氣候。如春天、晴天。——⑧一晝夜。如言今天、明天。⑨人的頭頂。——⑩古代的墨刑。——とある。本篇では「秋天」の意味について、本義としての「秋の空」(主に空間を指示)をより文言的な用法、派生義としての「秋」(主に季節を指示)をより白話的な用法とそれぞれ規定して用いる。

また「春天」「夏天」「冬天」各語の用法もこれに倣う。因みにここでは考察の對象を韻文に限定しているため、散文における用例は直接に言及しない。

(3) 當該作品の詳しい語釋は植木久行『和漢朗詠集』所收注釋補訂(十二)——付・菅野禮行『和漢朗詠集』譯注質疑(二中

## 中國文學研究 第三十五期

國詩文論叢」第十九集、中國詩文研究會、二〇〇〇年十二月）を参照。

- (4) この問題については「第八章、白居易と家屋表現——閑適詩想到関連させて、[六]渭村下邨宅」二二二頁～二二七頁（『白居易研究 閑適の詩想』汲古書院、二〇〇六年十月）で詳述した。

- (5) 加納留美子「〈近親者への哀惜〉中唐・白居易——親しい者への哀惜」「[腸] 表現による中國古典詩の分析——詩人の個性」（『中唐文學會報』第十四號所收、中唐文學會、二〇〇七年十月）の指摘に據る。

- (6) 「桓公入蜀、至三峽中、部伍中有得猿子者。其母緣岸哀號、行百餘里不去、遂跳上船、至便即絕。破視其腹中、腸皆寸寸斷。公聞之、怒命黜其人。」。

- (7) 初唐末から盛唐初の詩人である張諤の當該作品は『全唐詩』卷一百十に收録されるが、詩題を「九日」に作り、詩句を「秋來一作天林下不知春」とする。白話系語彙「秋天」の引用例としては不適切と言えよう。

- (8) 韻律整備の必要性から詩語が複數化していく現象は、例えば名詞（楊〔平聲〕∥柳〔仄聲↓上聲〕・途〔平聲〕∥路〔仄聲↓去聲〕・階〔平聲〕∥砌〔仄聲↓去聲〕・窓〔平聲〕∥牖〔仄聲↓上聲〕中〔平聲〕∥裏〔仄聲↓上聲〕・時〔平聲〕∥處〔仄聲↓去聲〕・人〔平聲〕∥客〔仄聲↓入聲〕・宵〔平聲〕∥夜〔仄聲↓去聲〕……、動詞（成〔平聲〕∥就〔仄聲↓去聲〕・歛〔平聲〕∥側〔仄聲↓入聲〕・開〔平聲〕∥發〔仄聲↓入聲〕∥放〔仄聲↓去聲〕

聲〕……）、形容詞（多〔平聲〕∥足〔仄聲↓入聲〕・遙〔平聲〕∥杳〔仄聲↓上聲〕……、副詞（將〔平聲〕∥欲〔仄聲↓入聲〕・能〔平聲〕∥解〔仄聲↓上聲〕・堪〔平聲〕∥可〔仄聲↓上聲〕・宜〔平聲〕∥好〔仄聲↓上聲〕……）、介詞（於〔平聲〕∥向〔仄聲↓去聲〕……）など幅廣く認められる。「平仄互用」による同義類語の活用は、唐代近體詩における四季表現にも大きな影響を與えていると考えられよう。

- (9) 『全唐詩』本文に文字の異同ないし注記がある場合は、用例として採集していない。また「欲秋天」「早秋天」などの表現も全て除外している。

- (10) 杜甫作品で文言用法のものとしては、「春夜峽州田侍御長史津亭留宴」（『全』232）「巴西聞收宮闕送班司馬入京」（『全』234）「以上、春天」「洗兵馬」（『全』217）「茅屋爲秋風所破歌」（『全』219）「追酬故高蜀州人日見寄」（『全』223）「奉贈嚴八閣老」（『全』225）「客夜」（『全』227）「送陵州路使君赴任」（『全』227）「覃山人隱居」（『全』231）「送十五弟侍御使蜀」（『全』231）「潭州送韋員外牧韶州」（『全』233）「以上、秋天」が指摘できる。

- (11) 本詩の「春天」については、文言的用法の「春の空」とする説が多いが、複數の用例から考えてここでは白話的用法と位置づける。この點を巡る「異同の所在」「異同の類別」「異同の論據」の詳細については、松浦友久編『校注唐詩解釋辭典』（大修館書店、一九八七年十一月）三三四頁～三三五頁（宇野直人執筆）を参照。

- (12) 賈弇・沈仲昌・謝良輔・鮑防・鄭概・范燈・樊珣・劉蕃によ



る「狀江南」詩（『全』307）を参照。

（13）この點の詳細については項楚ほか『唐代白話詩派研究』（巴蜀書社、二〇〇五年六月）を参照。

〔補記〕

弘前大學の植木久行教授と静岡大學の楊海英教授からは、本稿執筆に際し有益な教示を得た。改めて厚くお禮申し上げたい。